

マルコ 2 : 18-3 : 6

「イエスは人間の作った宗教を打ち壊し、新しいいのちをもたらされる」

2:18 ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは断食をしていた。そして、イエスのもとに来て言った。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食するのに、あなたの弟子たちはなぜ断食しないのですか。」 2:19 イエスは彼らに言われた。「花婿が自分たちといっしょにいる間、花婿につき添う友だちが断食できるでしょうか。花婿といっしょにいる時は、断食できないのです。 2:20 しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。その日には断食します。 2:21 だれも、真新しい布切れで古い着物の継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、新しい継ぎ切れは古い着物を引き裂き、破れはもっとひどくなります。 2:22 また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるのです。」 2:23 ある安息日のこと、イエスは麦畑の中を歩いて行かれた。すると、弟子たちが道々穂を摘み始めた。 2:24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。」 2:25 イエスは彼らに言われた。「ダビデとその連れの人たちが、食物がなくてひもじかったとき、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。 2:26 アビヤタルが大祭司のころ、ダビデは神の家に入って、祭司以外の者が食べてはならない供えのパンを、自分も食べ、またともにいた者たちにも与えたではありませんか。」 2:27 また言われた。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません。」

3:1 イエスはまた会堂に入られた。そこに片手のなえた人がいた。 3:2 彼らは、イエスが安息日にその人を直すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。 3:3 イエスは手のなえたその人に「立って真ん中に出なさい」と言われた。 3:4 それから彼らに、「安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか」と言われた。彼らは黙っていた。 3:5 イエスは怒って彼らを見回し、その心のかたくなのを嘆きながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。彼は手を伸ばした。するとその手が元どおりになった。 3:6 そこでパリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちといっしょになって、イエスをどのようにして葬り去ろうかと相談を始めた。

## 導入

聖餐式に与る週は、マルコの福音書を毎月学んでいます。

これまで学んだ箇所では、マルコは次の3つの事柄に焦点を当てていました。

1. イエスがどのようなお方でどんな権威の持ち主であるか。  
イエスは神の愛しておられる御子であり (1 : 11) 、すべての人に対して、また病に対しても権威をお持ちです。
2. イエスが天の栄光を離れてこの世に来られた理由。  
1 : 38 は、イエスが来られたのは神の御国の福音を告げ知らせるためだと語ります。イエスが起こされた奇跡は、人々の注意を福音に向けるためであり、イエスが神であられることを証明するためです。
3. イエスは誰のために来られたのか (2 : 17) 。  
イエスは、正しい人を招くためではなく、罪人を悔い改めさせるために来られました。イエスなど必要ないと思う人やイエスなしでも天国に行けると思っている人もいますが、宗教的で良い人であってもそのような考えではイエスに退けられます。

先ほど読んだマルコ 2 : 18-3 : 6 で、マルコはこのメインテーマにそって話を続け、イエスの生涯と働きの中で実際に起こった3つのできごとをとおして、これらのテーマを浮き彫りにします。今朝の学びでは、その3つのできごとを取り上げていきます。

### 1. イエスのご自身を花婿と呼ばれる。(18-22 節)

18-22 節で、宗教指導者たちはイエスの弟子たちが断食をしていないことでイエスに詰め寄ります。

まずここで、ユダヤ人の断食の習慣について知る必要があります。旧約時代の断食の習慣はおもに、罪を嘆いていることの証でした。ユダヤ人の間でそれが義務付けられていたのは、年に一度の「贖いの日」だけでした。（レビ記 16 章）

この日は、ユダヤ人にとって非常に神聖な日でした。年に一度、ユダヤ人の大祭司が若い雄牛の血を神へのいけにえとしてささげます。

人々を罪からきよめるために身代わりとしてささげられるいけにえでした。

今でも、この日には多くのユダヤ人が断食をします。

しかし、イエスが地上におられた時代の厳格なユダヤ人は、毎週月曜日と木曜日の午前 6 時から午後 6 時まで断食をしていました。

断食をするべき正当な理由はもちろんありますが、当時の宗教指導者たちは自分たちの正しさをひけらかすために断食をしていました。

断食は罪を悔いてへりくだるためのものであり、それをとおしてさらに神と親しく歩めるようになるものです。それなのに、パリサイ人たちは、断食をして人に褒めてもらうことを望んでいました。

イエスの弟子たちが月曜日と木曜日になぜ断食しないのかという問いに対し、イエスはお答えになる中で、ご自身がどういうお方でなぜ来られたのかについて新たに語られました。

断食についての質問に対し、イエスはふたつに分けて答えられました。

まず、イエスのご自身を「花婿」、弟子たちを「花婿の友だち」と呼ばれました。

ユダヤ人の結婚式は、現代の西洋式の結婚式とはずいぶん違います。

ユダヤ人の男女は結婚してもすぐに新婚旅行に行ったりはしません。結婚すると、その後一週間宴会が続きます。

家を開放して食べ物を振る舞い、祝います。その期間中、宴会の客人たちは断食を免除されます。ユダヤ人の伝統では、結婚の宴会期間中は決して断食をしないのです。

イエスはここで、断食をするべきではないとおっしゃっているのではありません。イエスがともにおられる間は断食をしなくてよいとおっしゃったのです。

つまり、イエスのご自身をイスラエルの「花婿」と言っておられるわけです。

ホセア、イザヤ、エレミヤといったユダヤの預言者は、ユダヤのメシヤについて「夫」という不思議な表現を用いています。（ホセア 2 : 16-20、イザヤ 54 : 5、エレミヤ 31 : 3）

しかし、「花婿」であるイエスといつの日か天国で美しい花嫁になる人々の関係性をしっかりとらえれば、これは不思議ではありません。

聖書は、イエスが罪を赦してくださるお方と信じて信仰をおいたすべての人が「教会」であり、その「教会」はイエス・キリストの花嫁であると教えます。

#### エペソ 5 : 25-27

5:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。 5:26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、 5:27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

多くの日本人女性は、西洋式の結婚式を好むようです。

美しい純白のドレスに身を包み、素敵なヘアスタイルで愛する人と結婚し、幸せな一日を過ごします。

そういう経験をもうした人もいるでしょうし、そういう日が来るのを待っている人もいますでしょう。

けれども、結婚式の日よりももっとすばらしい日を夢見てください。それは、「イエス・キリストの花嫁」になる日です。

いつの日か、私たちは写真に写っているどんな花嫁よりも美しくなります。

なぜなら、イエスを受け入れ、イエスを愛しているなら、イエス・キリストの義をまとうことになるからです。

私たちは、天国で開かれる小羊イエス・キリストの婚礼の宴席に参列します。

そこには断食はありません。ただ喜び祝うのです。

イエスの弟子たちは断食をしませんでした。それは、イエス・キリストという人をとおして神のご臨在に触れていたからです。これはすばらしい祝福の時代でしたが、イエスが地上におられることは婚礼の宴席にいるようなものであるということを理解して喜ぶ人は非常に少数でした。

次に、イエスは断食をしないことについての問いに答える中で、新しいものと昔のものを関連付けられました。

イエスは、当時の人にわかりやすい例をふたつ挙げて話されました。

それは、イエスがもたらされるのは昔のものと関連はあってもまったく新しいもので、昔のものは完全に取って代わられることを示すためでした。

イエスは、ご自身ももたらされる新しい時代は、旧約時代の宗教の型にはまらないことを明らかにされました。

イエスは旧約の律法を批判なさったわけではありません。ただ、新しい時代には古い習慣が適切でなくなるとおっしゃったのです。

イエスは 21 節で、真新しい布切れで古い着物の継ぎをするようなことはしないとおっしゃいました。これは、雨で布が濡れたときに、新しい布が縮むので、強い新しい布が古い部分を引っ張ってしまってよけいに破れるからです。

22 節では、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりしないとおっしゃいます。当時、ワインはビンではなく動物の皮でできた袋に入れて保存しました。

皮が新しい間は、多少の伸縮性があるので、破れることなく少しは伸び縮みします。

しかし、皮袋が古くなると、硬くなって伸び縮みしません。

新しいワインはまだ発酵が進んでいる状態で、二酸化炭素などの気体が出るので、気圧が高まります。新しいワインを古い皮袋に入れると袋は破裂してしまいます。

そうなると、ワインも皮袋も台無しです。

新しいものと古いものをいっしょにすることはできません。新しいものはまったく新しく、古いものと相容れないのです。

イエスがもたらされる新しい時代は、旧約時代の宗教とは相容れませんでした。

1960 年代にテレビ説教で有名だったスコットランド人の聖書教師は次のように言っています。

「人は年を重ねるごとに新しいものや慣れ親しんでいないものに対して感じる抵抗が大きくなる。生き方や習慣に修正を加えることをいやがるようになるのである。」

日本には、文化や風習を形成してきた古くからの宗教が深く根付いています。

仏教や神道の慣わしは、日本の文化を形成してきたと言えます。

西洋式の結婚式を取り入れたりする人は多くいても、日本文化にキリスト教を加えることは不可能です。

キリスト教を喜んで受け入れるなら、生き方全体が大きく変わるはずですが、新しい心躍るようなことですが、同時に、徹底的な変革が必要です。

聖書の教えと異なる日本の風習に倣うことはしたいと思わなくなります。

それだと、古い着物に付けた新しい布切れのつぎはぎのようになってしまいます。

日本でクリスチャンとして生き抜くには、花婿イエスをしっかり知り、自分がキリストの花嫁であるという自覚を持つ必要があります。そうすれば、いつの日か天国でイエスにお会いすることができるでしょう。

イエスと一対一の関係を始める唯一の方法は、イエスがどういうお方でなぜこの世に来られたかを認めることです。イエスは神であり、私たち罪人のために死ぬために来られました。

私たちは古い宗教を捨てて、私たちを造ってくださった創造主のもとに来て、このお方こそ私たちの救い主であると認める必要があります。  
あなたは今日、そうしようと思いませんか。

## 2. イエスは安息日の主である。(23-28節)

マルコは 23-28 節で、イエスがユダヤ人の伝統を破ったできごとをもうひとつ紹介しています。この時、安息日にしてよいこととしてはいけないことについて宗教指導者たちがイエスを責めます。

神がユダヤ人をご自身の選びの民とされたとき、民が従うべき 10 の律法を与えられました。そのひとつに、7 日間の 1 日を聖なる日として、その日にはどのような仕事もしてはいけないというものがあります。その日は、休息の日であり、創造主なる神を覚える日だからです。もともと、何をしてもよくて何をしたらいけないという具体的な決まりはありませんでした。けれども、年月を経て、安息日にしてはいけないことや何が仕事と見なされるかについて宗教指導者たちが細かい規則を作りました。

その中には、神によって導かれたのではないことが明らかな内容もあり、この聖なる日を律法的にとらえる姿勢をもたらしてしまいました。

今日の個所で、イエスの弟子たちは麦畑のなかを歩きながら穂を食べるために摘んだことを非難されました。

宗教指導者たちが導入した多数の規則の中に、安息日に刈り取ること、脱穀すること、穀物の選別をすること、そして食事を準備することを禁じる 4 つの規則があったからです。

厳密に言うと、弟子たちはこの律法を破っていました。

イエスはこの批判に、旧約聖書に登場するできごとを引用してお答えになりました。(サムエル第一 21 : 1-6)

この話を持ち出すことで、イエスは弟子たちに対する非難が不当であることを証明し、宗教指導者たちがみことばを誤って解釈していると指摘されました。

安息日は人が恩恵を受けるために造られたのであって、重荷を負わせるためではないことをイエスは教えられたのです。

残念ながら、宗教指導者たちは神ご自身より自分たちの宗教を尊重することに心を注いでいました。

28 節は、人の子、つまりイエスは安息日の主でもあると語ります。

要するに、神であるイエスは安息日を正しくとらえることができるということです。イエスご自身がももとの律法をお造りになった本人なので、ただしく解釈することもおできになるのです。当時と同じく今日も、イエスは律法ではなく恵みに基づいて安息日をとらえてくださいます。それはどういう意味でしょう。

### 適用

ここで、「現代版十戒」の著者ブライアン・エドワーズという英国の作家の言葉を引用したいと思います。

自著の安息日または日曜日に関する部分を要約して次のように語りました。

「この日の理想的な過ごし方は、神の民とともに神を礼拝し、神に仕えることです。そうすることによって、私たちが心を神に向け、神の御声を聞き、真理を心に蓄えて、これから始まる一週間にその真理を実践するためです。

また体を休ませて充電する時間も必要です。

けれども、この日を他の人がどう過ごすか細かいことについてとやかく言うことはできません。

この日の目的に基づいているなら、どんなことも許されています。

この日を無視したり、妥協することで戒めの効力を弱めようとしたりするのは、人が作り出した多くの規則でこの日を台無しにするのと何ら変わりありません。」

マルコは最後に、イエスが安息日に男の人を癒したできごとを紹介し、安息日についてのイエスの捉え方を明確にしました。

### 3. 人の作った宗教はイエスを排除する。(3:1-6)

宗教指導者たちとの3度めの論争が起こるこの個所で、パリサイ人はイエスを殺そうと企てるほど憤慨しました。

パリサイ人には、命が危険な場合を除いては安息日に癒してはいけないという規則がありました。イエスは、手に奇形または障害のある男性を癒すために、この規則を破りました。

この奇跡を起こすことで、イエスのご自身の命以上にあわれみを大切にされました。

残念ながら、喜んだのは手を癒してもらった本人だけでした。

#### 適用

宗教は、恵みとあわれみを殺してしまうものです。

心に喜びをもたらすことは決してありません。宗教がもたらすのは、重荷や誇りだけです。

聖書の真理を教え、実生活でその真理を実行しようとする中で、恵みと愛の福音を実践するのはクリスチャンの務めです。

あらゆるニーズや傷を持つ世間の人々に背を向けるのは簡単ですが、私たちがまだ罪人だったときにイエスが十字架上でなしてくださった御業を覚えるなら、神の恵みと愛をこの世に差し伸べずにいられるでしょうか。

今年、私たちが神に助けをいただいて、言葉でも行動でも神の愛を世に示すことができますように。

アーメン。